

一―時、水がかれる。この辺より傾斜が急になる。歩いている所はまるでドロ沼のようだ。

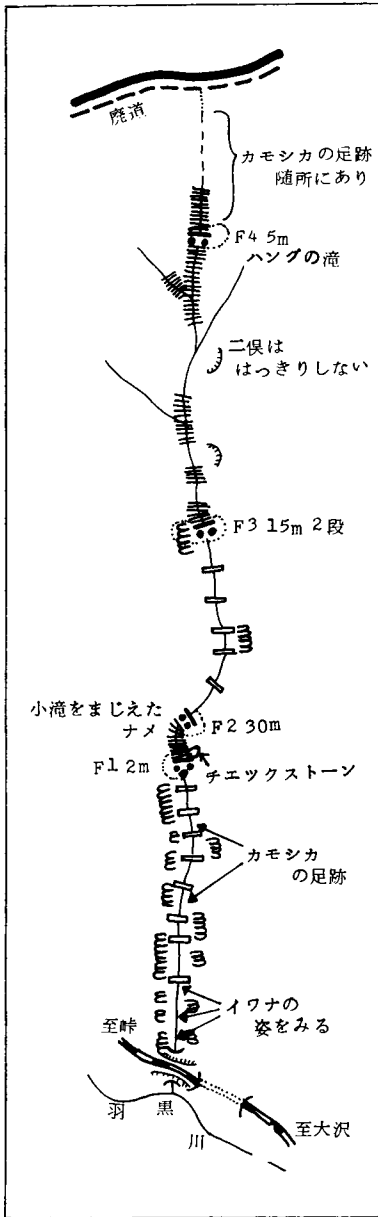
私達は八二二峰のピークを目指しているつもりだった。しかし、ここではすでに九〇四峰のピークに向かっていた。結局、予定した沢とは別の元小屋川を下ることになる。

〔タイム〕

峠九〇〇―長根沢出合一〇〇―水かれ一―

〇―稜線一―三〇

(記・)



巖石沢 (作図: i)

巖石沢

一九七七年七月三十一日

◆天気(晴)

峠から線路を少し歩いて巖石沢に入る。水量は少なく、歩きはじめたらすぐイワナの姿が見えた。二〇分間の間に三匹。結構いそう。二〇分で砂防ダム。ここからは連続する砂防ダム越えだ。一つ越えたとと思ったら五分と歩かないうちに次のが現われる。合計八個を数えた。

小滝をまじえたナメを越えるとこの沢最大の滝三〇呎に着く。左岸を慎重に捲いて越える。この上流もまた砂防ダムの連続である。小規模のものばかりだが、よくもこんな所につくったものである。一〇時一〇分F3一五呎二段について昼食。

この上流はただでさえ少ない水量が更に減っている。ナメが続く。沢幅がせまいし、水量も少ないので、ナメといっても一本尾根をへだてた隣の大滝沢のナメのようなそう快さはない。やがてF4五呎のハング滝。左岸にはつきりしたけもの道があり、新しいカモシカの足跡がついている。この足跡はこれからもほぼ稜線直下まで随所にみられた。しばらくナメ上を歩くと水もなくなり、五分程のヤブこぎで稜線に出る。

稜線上には昔かなり歩かれたと思われる踏跡があった。今はもう廃道化していてヤブがかぶさっていたが踏跡そのものはつきりしている。峠駅まではつきり続いていた。

(記・)

〔タイム〕

峠七・二〇—巖石沢出合七・四〇—七・五〇—稜線一
一・四〇—峠一三・一〇

大滝沢

一九七五年八月三十一日

子・

◆天気(晴)

始発列車で峠まで行き、大滝沢に入る。八時半廻行開始。出合からそう快なナメが続き快適な沢だ。いくつものナメ滝を次々に越えていく。九時に大滝到着。落差一〇〇呎といわれる大きな滝だ。狭い落ち口から末広がりになって落ちている。少しはなれた所から見ると無数の白糸をかけたようで見事な滝である。ハーケンを何枚か打てば直登できるとのことだが、我々は直登が目的ではないし、その装備もしてきてないので、高捲きして上に出る。

大滝の上もまたナメの連続である。滝もいくつかかかっているが、いずれも角度のついたナメ状の滝である。九時五〇分ホラ貝沢出合に到着する。本流は左にカーブしている。ホラ貝沢は沢登りをする仲間では少し名の知られた沢なのに、出合はややもすると見のがしてしまうような貧弱な沢である。先に進む。この先も次々とあら